

示II-5 固有食道腺から発生した食道乳頭腺癌の1例

新潟大学第1外科

中川 悟、西巻 正、田邊 匡、小向慎太郎
大日方一夫、神田 達夫、鈴木 力、島山 勝義

【はじめに】食道腺癌はまれな腫瘍で全食道悪性腫瘍の0.2%~24%と報告されている。今回食道腺から発生したと考えられる乳頭腺癌の1例を経験したので報告する。

【症例】66歳、男性。下部食道癌の診断で1992年5月に経裂孔的食道亜全摘を施行された。病理所見ではa2, n2(+), P10, M0でありStage IIIであった。退院後4ヶ月目に局所再発と多発肝転移を認め、翌年3月死亡した。

【病理所見】下部食道に7.3×5cmの潰瘍性病変があり肛門側の辺縁にポリープ状の病変を認めた。潰瘍性病変は低分化扁平上皮癌、ポリープ病変は乳頭腺癌であった。腺癌領域では、粘液染色でAbとPAS染色で、免疫染色ではCEA, secretory componentとlactoferrinに陽性細胞を認めた。

【まとめ】本症例の乳頭腺癌は、染色態度が固有食道腺の導管の性質に近いことから、導管由来の癌と考えられる。

示II-6 食道憩室内癌の1例

豊科赤十字病院 外科

佐藤敏行, 松下啓二, 尾崎一典, 北原修一郎, 荻原勉彦

食道憩室内に癌が発生することはまれである。今回我々は、下部食道憩室内に発生した食道扁平上皮癌の1例を経験したので報告する。

症例: 75才、男性。近医より胸部下部食道に連続した2つの食道憩室にて経過観察されていた。平成10年3月、上部消化管内視鏡施行され、門歯列より39cmの食道憩室内生検にて mucoepidermal carcinoma と診断された。平成10年4月当科紹介受診。食道造影検査上、憩室内に結節状隆起病変を認めた。食道内視鏡検査では憩室内病変は0-Ip+Ibであり、ヨード染色で病変部に一致した不染帯を認めた。平成10年4月23日下部食道胃全摘術を施行した。

病理所見は squamous cell carcinom ie(-) ly(+) v(-) depth a intramural metastasis(-) n (-)であった。

本症例は、食道憩室のため経過観察中に上部消化管内視鏡にて診断されたものである。憩室内の病変は診断が困難な場合があり慎重を要すると思われた。

示II-7 食道表在癌と胃平滑筋肉腫の同時性合併の1例

国民健康保険神岡町病院外科¹⁾、富山医科薬科大学第2外科²⁾

黒木嘉人¹⁾、小田切春洋¹⁾、坂本 隆²⁾、塚田一博²⁾

【症例】54歳、男性。【現病歴】住民検診胃透視にてニッシェを指摘され1997年10月1日当科を受診した。内視鏡にて胃角部小彎に潰瘍を認め、切歯から25cmの食道に0-Ip+Ib病変を発見され同日入院となった。【検査所見】血液検査ではRBC 267×10⁴/μl, Hb 7.3 g/dlと貧血あり。腹部超音波検査では左上腹部に内部不均一なエコーパターンを示す腫瘍を認め、CT, MRIにて胃小彎に連続する内部不均一な充実性境界明瞭の粘膜炎下腫瘍と考えられた。血管造影で左胃動脈から栄養されるhypervascular areaとして描出された。【手術】右開胸開腹にて胸部食道切除。胃腫瘍は胃壁外に浸潤なく、胃小彎側と腫瘍を含めて切除され、大彎側胃管を作成し頸部にて吻合。【病理所見】食道病変は中分化扁平上皮癌、sm3, inf α, ly1, v0, 癌の広がり5x4.5cmであった(0-Ip+Ib)。右101番リンパ節1個転移陽性。胃は9x8x7cm大の境界明瞭な壁外性に発育する腫瘍で粘膜面に深い潰瘍あり。組織学的に固有筋層から発生したlow grade malignancyの leiomyosarcoma と診断された。

【術後】41.4Gyの放射線照射を施行し、術後11ヵ月現在再発徴候無く健在である。

示II-8 食道のいわゆる癌肉腫4例の検討

秋田大学医学部第二外科, * 雄勝中央病院

國安弘樹, 鈴木裕之, 斉藤礼次郎, 小川純一,

* 中村正明, * 天満和男

【目的】当科における食道のいわゆる癌肉腫4症例について検討した。【症例・結果】1972年1月から1997年12月までの全食道癌751例中、いわゆる癌肉腫は4例でその発生頻度は0.53%であった。全例男性で、平均年齢は58歳であった。主訴は嚥下困難が主であったが怒訴のない例も1例認めた。腫瘍の主占居部位はEi 1例, Im 3例と胸部中部食道に多かった。形態的には全例有茎性ポリープ状の腫瘍であった。上部消化管内視鏡による生検を施行し、2例が扁平上皮癌、1例が未分化癌、癌肉腫が1例であった。全例に食道切除術、リンパ節郭清が施行された。組織学的には深達度はa1以下で、リンパ節転移は4例中3例に認めた。病期はstage 0, II, III, IVと多彩であった。再発は2例に認め、1例は後腹膜、肺転移にて2年5ヶ月後に死亡、1例は肺転移にて経過観察中である。【結語】食道のいわゆる癌肉腫は稀な疾患である。文献的には手術以外に著効例は報告されておらず一般食道癌に準じた外科的治療が第一選択と考えられた。